

追憶 亡き父母を偲んで

北海道 青山 由喜子

これは、めまぐるしい変遷の中で、一少女が体験した終戦から引揚げまでの断片的な記憶である。

昭和十五年に渡満、父は満州拓殖公社奉天地方事務所勤務に勤務平穩な生活が続く。十九年には待望の妹誕生、とても嬉しかった。

その頃から度々B29が現われて遂に奉天は爆撃された。

奉天も危ないと少し離れた孤家子で農業経営をすべく移住した。数人の満人を使って畑作りは宮まれ、父は会社勤務、順調に時は流れたかにみえたが、昭和二十年八月二日、父に召集令状がきたのである。ささやかな別れの宴に涙、涙で北朝鮮に旅立った。そして十五日終戦である。何ということであろうか。父の出征が悔やまれず。

敗戦の悲報とともに陰悪な空気が漂い始めた。親交のあった満人に「早くここを立ち退いた方が良い。母子家庭を狙って略奪の計画がある。」と教えられ、工場の社宅に移るべく荷造りを始めた。引越しの前夜、家の廻りは取り巻かれあつという間に荷物は運び出されたのである。

がらんとした家の中で途方に暮れた三人、母三十五歳と十三歳の私、一歳五か月の妹、これからどうすればよいのか……

とにかく先に記した社宅に移り住んだのである。そこにはおおぜいの日本人が集結していた。

無一文になった私達、母はその日のかてを得るために早朝から男達に混じって肉体労働の日雇いに出かける。次第に疲労の色は濃くなり瘦せ細ってゆく姿を見るのが辛かった。

私は、幼い妹の世話をしながら少しでも母の手助けを一生懸命でした。私達はいろんな物を食べて空腹を紛らしたけれど、妹にだけは白米の御飯を与え続けた。羨ましくて生唾を呑み込みながら、妹の元気が出るように

と願いを込めて食べさせた。それでも栄養不足で痩せてゆくのです。

妹はときどき消化不良になり、私はあの子の便を何時も調べながら一喜一憂したものです。

父はどこにいたのであろうか、早く帰って来て！と心の中で叫びながら祈る思いで待った。

その頃父はソ連の捕虜となり過酷な労働を強いられ、少量のコウリャン飯に岩塩を振りかけるだけの食事に、毛穴から血を流して壊血病で死者が続出、これでは自分も遠からずこの姿になると思い脱走を計画したそうです。

失敗すれば即銃殺、命をかけての脱走には成功はしたものの、奉天までの道程は遠い。

人目を避けて歩き続け川の水を飲み、木や草の根を掘って毒でない限りの物を食したそうだ。その間の苦勞は私の拙い筆舌では到底表すこと不可能なり。

こうして記している私、苦勞づくめで亡くなった父を思い涙が流れて仕方がない。

そんなこととは露知らず、毎日線路伝いに兵隊が帰っ

て来る。もしか父では、もしかと遙かな姿に期待をかけて待つのです。

今日こそは……と願いながら失望の毎日です、まるで「岸壁の母」の歌のように私は待ちました。

その内に、ソ連兵が侵入し女子供に危害を加え、金品を巻き上げて行くとの噂が流れて来た。

いろんな噂に怯えながら社宅の門に見張りを置き、もしかのときは警鐘をついて避難することになった。女はみな頭を刈り男装し、顔を汚した。そんなことが三度ほどあり、最後のときは間に合わず事務所の机の下で震えていた。

三人のソ連兵がウイスキーの瓶をなめながら「ダワイ、ダワイ」と男性に近づき時計を奪うのを見た。腕に幾つものはめながらまだ欲しいのである。数個の時計をかざしながら意気揚々と帰って行った。なにごとともなく皆で喜び合った。

二十一年夏、引揚げの日が決まり喜びに沸いた、しかし帰らぬ父に心残り何とも複雑な気持ちでその日を持った。

ところが、出発の前日父がひょっこり帰って来たのである。

真黒に日焼けし髭だらけの顔に日が落ち込み、別人のようにやつれた父が門の外に立っているではないか、夢ではない、母と私の祈りが届いて父は生還したのである。思いつき胸に飛び込んでありったけの涙を流して喜び合った、一緒に帰れる幸せをかみしめながら、無蓋貨車にすし詰めとなる。

ゴトゴトゆっくり走る貨車である、何日揺られたのか、どの顔も油煙で真黒である。

何という港か判らないが（コロ島とかいっていた）日本に向かって乗船出来たのである。もう安心だ、着のみのままの私であるが、ルンルン気分でした。それから何日かして心の痛むできごとあり。

中年の弱々しく見えた夫人が船中で亡くなりました。大海原の真ただ中で遺体は海に投げられた、それからときを経つて今度は赤ちゃんが目を閉じた。食うや食わずの母親から母乳の出る苦もなく、赤ちゃんは飢えて死んだのである。両親は頬ずりしてはかき抱き、何回も

抱きしめながらそれでも仕方なくあきらめた、小さな遺体は海の藻屑と消えたのである。皆は言葉もなく冥福を祈った。

かくして何日航海したのか、日本の島が見えて来た。そのときの感涙に頬のつつ張ったのを覚えている。着いた港は舞鶴だったと思う、すっかり記憶して置けば良かったのにと今にして思うが、私達には書く物さえ無かったのだ。

かくして長い旅は終わったのだ。

故郷妹背牛に降り立ったのは、七月二十四日どしゃ降りの雨の中、母の実家に身を寄せて私達は毎日眠り続けました。暫らくそこでお世話になり落付きを取り戻した父は、再起へ向けて粉骨碎身の苦勞が始まるのであります。丸裸からの出発です。妹は三歳になっても歩けなかった。今思い起こすとき、よくぞ助かったものだと思ふのご加護に感謝するものです。

色々な仕事、商売、を経て、現在、公衆浴場を営んでいます。人口の減少、家族風呂の普及により、その経営状態は楽ではありません。家屋解体の廃材を主人も

真黒になって集め歩き燃料としていますが、年々疲労感が濃くなって参ります。

時代の流れとはいえ、贅沢三昧の現今、少々戸惑いを感じながらささやかに生きております。

父母の血と涙で築きあげたこの銭湯の灯を何とか消したくないものと、日夜頑張っている毎日でございます。

何は無くとも二男一女の母として、孫八人が宝です。

私の敗戦体験記

北海道 木村 久美子

私の父は、昭和十八年春に伯父とともにハラヘイに開拓団員として渡満し、十月には家族も呼び寄せたのとことである。

その後、気ままな末っ子である父は、鉄嶺の軍の倉庫と畑の管理の仕事に移り終戦を迎えたのである。

終戦の詔勅がラジオから流れ、父が男泣きに大声で泣いたのを見たのは私の小学校二年のときである。

その翌日であつたらうか、倉庫のあちこちに見知らぬ人の影が見え隠れし、夜霧の中を親に手をちぎれるように引張られ裸足で逃げ回り怖く、冷たかったのを今でも覚えていいる。

そして、八月三十日の昼下がりに管理人の家族は倉庫の屋根裏に隠れるように指示があり、全員息を殺して隠れた。私は仏様を背負わされて隠れたことを覚えている。隠れたのは大人ばかりではない。幼児も赤児もいる。耐え切れなくむずかり、声を出す。身のちじむ思いで皆が耳をそばだてる。階下の様子が変わらなければホッとする。

だが赤児は息苦しさに泣き出す。母親が、この子のために皆に迷惑がかかってはと赤児を抱いて降りて行った。その物音に兵士が気付いてやってくる。早足の靴音、皆生唾を呑み込んで聞きいる。

次の瞬間、赤児の母親の悲鳴のような「どうか、私とこの児を一思いに殺して下さい」……。と

屋根裏に隠れている男子の最年長者は、私の兄（当時小六）であつた。即救援に下りた。二、三回兵士と兄の